※SAMPLE※

天宮
amamiya

イラスト/表紙デザイン
ねね 様

タイトルロゴデザイン
加瀬 様

本作品はフィクションです。
作中に登場する名称はすべて架空であり
実在のものとは一切関係ありません。

転載・複製・複写・再配布
高校在学中含む十八歳以下の購入・閲覧
これらすべてを固く禁じます。

人物紹介

mido　senri

御堂千里

ゲームが趣味の大学二年生。
蔵のある大きな実家で暮らしている。
流行に疎い陰キャ。ビビりでヘタレ。
身長170センチくらい。童貞。

ya ko

八狐

年齢不詳の狐のあやかし。
一見クールな印象の美形だが、
性格は明るくミーハーでマイペース。
身長180センチ超。霊力さえあれば、
姿形はある程度自由に変えられる。

sagisawa　shoma

鷺沢翔真

ishimochi　gen

石持弦

千里の大学の友達。
鷺沢は童顔で眼鏡の明るいオタク。
石持は高身長で寡黙、気が利く。

目次

第一章……五
第二章……六十二
番外編……一〇六
第三章……一一四

第一章

蔵の掃除をしろと爺ちゃんに言われ、ここ数日すっかりこもりきりだった自室から蹴り出されたおれは、ホウキだのバケツだの雑巾だの、用具一式をかき集め渋々、庭の隅にそびえ立つ、錆びた扉の前までやって来た。

うちはいかにも古めかしいって感じの家で、昔はそれなりに裕福だった、らしい。ご先祖様にはさっぱり興味がなく、日本史も苦手だったおれには誰がいつどうして何をしたとか、詳しいことはさっぱりわからない。が、その金持ちの名残とやらは、おれの生まれ育った無駄にでかい一軒家と、その周りを取り囲むだだっ広い敷地がいやでも教えてくれる。昔と違うのは、お手伝いさんもいなければ送迎の車もない、今はごくごくふつうの、どこにでもある庶民のうちだということ。

ようやく講義も試験も綺麗さっぱり片付き、やっと訪れた春休みくらいゆっくりさせてくれと、毎日ゲームばかりして過ごしていた。そんな大学一年の、おれ。御堂千里。この古びた家には似つかわしい、ややお堅い名前だが、特に真面目でも堅苦しくもない、平凡な十九歳だ。庶民らしく公立大学に通い、もうじき二年目を迎える。

誰もが想像する華々しいキャンパスライフ、いわゆる大学デビュー的なやつは、おれには無縁だった。それまでの学生時代も、教室の隅でぼんやり過ごして、部活もバイトもやらずに帰ったらゲームする毎日で、大学もその延長線。

オリエンテーションや講義に出るうちに、おれと似通ってどこか陰気な、気の合いそうな奴らを二、三人見つけ、程々につるんで最低限の人脈を確保し、なんとなく一年やってきた。刺激はないが、実に平和な大学生活だ。

環境が変わっても、人間は、そう簡単には変わらない。おれ自身別に変わりたくもないし、変わらないままで何も問題ないと思っているから、余計にそうだ。けれど親や爺ちゃんは、大学に入ったおれが、少しは社交的で活発になることを期待していたみたいだった。

ゲーム以外これといって趣味もない。派手な反抗期も、思春期らしい浮いた話もなく育ち、日々光る画面に向き合う自堕落なおれを心配……というより、いっそ不安に思っているのか、大学に入ってからは頻繁にあれこれと口出ししてくるようになった。そのたびに、単位は取ってんだからいいだろとか、若者らしいってなんだよ、とか言い返していたけれど、大学では一人暮らししている奴らも多く、最近は少しだけ、実家でだらけてるおれの肩身が狭いような気もしてきて……。

そんな矢先に、たまには家のことくらい手伝えと言われたのが見事に刺

さって、いつもみたいに爺ちゃんの言葉を突っぱねられなかった。
昨日までは冬そのものという寒気が猛威を振るっていたが、今日はやけに暖かい。だからまあ、たまには外出てみてもいいかなって。そういう気持ちで、だるい身体をなんとか起こしてやってきたけれど。
目の前にそびえ立つ蔵は、降り注ぐ春めいた日差しを周囲の木々に遮られ、人を寄せつけない、いかにも冷え冷えとした雰囲気を漂わせている。爺ちゃんたちだってまめに手入れをしていないのだ。そんな場所の掃除を、ここぞとばかりに人に押しつけるなんて、身内ながらなかなか意地が悪い。
蔵は我が家の隣――といってもそこそこ広い私有地なのでそれなりに距離があって、玄関を出てから歩いて三分くらいはかかる。敷地の端の方にぽつんと建ってる、うらぶれた古い建物。ちなみに現在の用途は開かずの物置。

子どもの頃は、探検と称して何度か中に入ったこともあった気がするが、積まれていた箱から適当なガラクタを取り出して遊んでいたところを爺ちゃんに見つかり、こっぴどく叱られて以来寄りつかなくなった。子どもには危ない場所だというのもわかるが、そういう記憶が結びついているがゆえに、今更ここに来る羽目になるとは……というどこか納得いかない気持ちが燻っている。当時はわずかながら抱いていたワクワク感もとうに消え失せ、今はむしろうっすらと不気味な雰囲気に、胸騒ぎのような何かを感じ取る。

外観はボロいくせに、年季が入ったせいか、いやに頑丈めいた雰囲気の扉に手を掛けた。ほら、いかにもなんか出てきそうだ。ホラゲーだったらこの中には確実に、居る。

しかしビビってたって掃除は終わらない訳で。何もせずに戻って誤魔化

したところで、叱られるのは火を見るよりも明らかだ。流石にそんな小学生みたいな真似はしない。ごくん、と喉に落とした大きな唾の雫で、ざわつく心臓を誤魔化した。

指先にぐっと力を込めると、扉は重たく軋みながら開き、何年ぶりかの建物は、昔と変わらない鬱蒼とした威圧感でおれを迎え入れた。

「うっわ……っ、げほっ、ごほっ……」

背後から差し込む陽の光に照らされ、細かい埃が宙に舞い、きらめく。呼吸するだけでそれらを吸い込んでしまい、思わず咳き込んだ。こんなことならマスクもしてくればよかった、などと後悔しつつ、おれはもう一歩踏み出して、蔵の中をぐるりと見回した。

奥行きはそれほどなかった。大股で歩いたって五歩もあれば、向こうの壁までたどり着ける。外から見ても割とこぢんまりとした建物だったので、

そうだろうなと納得した。記憶の中ではもう少し広かった気がしたが、昔は自分もチビだったから、こんなものだろう。

ただ、体感としては、蔵の中は把握した広さよりずっと窮屈に思えた。ただでさえ広くはない空間に、埃の積もる段ボール箱が積み上げられ、色褪せたまま膨らんだ紙袋が並び、蜘蛛の這う棚やら、汚れた木の板やらが所狭しと置かれ……異様な圧迫感をもたらしている。

「ごほっ、げほっ、ごほっ……。はぁ……これを掃除とか、どこをどう片づけりゃいいんだよ……」

埃を吸わないよう、片腕で口と鼻を覆いながらぼやく。

とりあえず持っていた掃除用具を床に下ろした時、おれは手前にある粗末な階段に気が付いた。

蔵は二階建てになっている。左手に続く、板だけを並べたような隙間の

でかい階段が、二階への入口だ。しかし、そこに足を踏み入れた記憶はおれにはない。幼き日のおれが危険だと判断したのか、はたまた今と変わらず単純にビビりだったのか……とにかく上には登らなかった気がする。

なんとなく、覗いてみるかという気持ちになった。今なら、昔ほど怖いことはないし、というか上も掃除しないといけないなら、最初に確認しておいた方が効率もいい。

おれが最も下段の板に足を乗せると、大学生男子の体重に耐えかねてギィイ、と不穏な音が鳴り響いた。怖すぎる。さっさと登ろう。

一歩登るたびに不安が増したので、身を屈めて這うように両手も使い、四つ足の動物みたいにして登る。そうして二階にひょっこり顔を出すと。

「あれ……？」

そこには何もなかった。無。友達の引っ越しの手伝いで呼ばれた時に見

た、一人暮らしのワンルームみたいな、ただの空間。
一階があれだけ物で埋め尽くされているというのに、二階には綺麗さっぱり物がない。おれは首をかしげた。
「はぁ？　なんだこれ。どういう使い方してんだよ……。上だけ手入れとか……って、あ……んん？」
でかい独り言をもらしつつ、完全に二階に上がってしまおうと目の前の床に手をついて、そして、おれはおかしなことに気が付いた。
そこには、埃一つ落ちていなかった。驚いて自分の掌を見るが綺麗な肌色のままだ。白く汚れた様子はない。おそるおそるもう一度床を撫でるが、まるで水拭きされた後のようにツヤツヤと、綺麗な木目の感触があるだけだ。
物がないのは、二階まで持ってくのがだるいとか、物置としては使うに

は不便だから、とか納得できるだけの理由はあったけれど。
下があれだけ汚いのに、上だけ綺麗に掃除されているなんて、そんなこと、あるか？
「うぉっ……！」
その時、バタンと階下で大きな音がして、おれは不安定な体勢のまま、その場で器用に飛び跳ねた。多分、扉が閉まった音だ。埃まみれの場所にいたくはないから、少しでもマシになればと思ってわざと開けてきたのに。決して、怖いからではない。
風で閉まるようなやわな造りじゃない。そもそも今日は穏やかで風なんてなかった。誰かが勝手に閉めた？　爺ちゃんか？　冗談じゃない、人に掃除押しつけといて！

瞬発的に怒りが込み上げ、おれが勢いよく振り返って階下を見た、その瞬間。

背を向けた二階から、見知らぬ澄んだ声が降ってきて、そっと耳の縁を撫でた。

「……あら？　これはこれは、どなたでしょう？」

「ッ、え!?　お、わあっ！」

その、息もかかるほどのゾクゾクするような距離感。聞こえるはずのない声がした驚きで、おれはガクンとバランスを崩して階段から滑り落ちかける。幸い、手足をついて慎重に登っていたので、間一髪で板の端を掴んで体勢をキープした。

い、今の何。どこから？　え？

慌てて周りを見回すおれに、今度は頭上から声が落ちてくる。

「あれま、もしかしてその反応……！　私の声、聞こえるんですか？」
声はなぜか驚いているようで、しかもなんだかうれしそうだった。いやなんでだよ。こっちだよ、驚いてんのは。
理解不能なシチュエーションにぶち当たったおれは、すぐさま脳内で、一階に駆け下り扉を開け外に飛び出す想像をしてみた。しかし、そのシミュレーションは悲しいことにうまくいかない。こういう時、扉は開かないのがお決まりの展開だからだ。半泣きになって扉を叩くおれの背後から迫ってくる何か。それがなんなのかも分からないまま襲われ、叫び声を上げながら視界は暗転。詰み。ゲームオーバー。じゃあどうする？
「マジで何なんだよっ、誰なんだよっ!?」
パニックになったおれは、情けなくも階段でへっぴり腰になりながら叫んだ。するとまたどこからか、わぁ！　と歓声めいたものが聞こえてくる

ので、身震いする。その声はうっとりと綻びた。
「本当に聞こえるんですね……うれしい……♡」
ぞくりとした。生まれてこの方幽霊なんて見たことも感じたこともないし、幻覚や幻聴に悩まされることだって、一度たりともなかった。なのに、なんなんだこれは。古い家あるある、先祖の霊および座敷わらし的なやつなのか。でもそうだとしたら、少しイメージが違う。声色は大人びていて、なおかつ穏やかでどこか気品がある。会話が通じない厳めしい雰囲気も、わざとらしいくらいの稚気もない。なんというかすごく……今っぽい？
とにもかくにも異様であることには違いなく、おれはとてつもない恐怖を感じ、すっかり腰が抜けた。空中からくすくす、と静かに、気味の悪い笑い声だけが響いている。おれはガタガタと震えながら言った。
「な、なんなんだよも〜……フツーに怖いっつーの……」

すると謎の声ははっとして、
「あっ……ごめんなさい。怖がらせるつもりはなくてですね。まずは姿をお見せしましょう。それで、少しは怖くなくなるはずですから」
と言った。おれの頭の中はたちまち大量のクエスチョンマークで埋め尽くされる。
そうして――何もなかった二階の空間にふわりと舞うようにして現れたそいつが人間じゃないことは、おれにもひと目見てわかった。
化け物は、全体的には人の形をしていた。しかも、かなりの美形だった。
ただし頭には、大きな獣の耳がついていた。なんだ……あれ？　犬、じゃないな。狐？　そしてそれを差し引いても、身長はきっとおれより高い。１８０くらい？　かなりの高身長。でも、ガタイが良いというよりかは、すらりとしていて縦に長い。

腰まで届く長い銀髪が、薄暗い蔵の中できらきらと発光して見えた。和装ではあったが、自分の知識に当てはめれば、歴史の教科書や時代劇よりかはアニメやゲームのキャラクター寄りで、コスプレイヤーみたいにも見える。非現実的な獣耳のせいかもしれない。しかし着物には安っぽいペラペラ感はなく、素人目でも質が良さそうだと感じられた。袴を履いた腰の後ろに、ぶわりと膨らんだ立派な尻尾が見え隠れする。

細身で、中性的な顔立ちとはいえ、着物の袖からのぞく手の骨格を見るに多分――男。化け物に性別があるのかは知らないが……とにかく、こんな超のつく美人を間近で見た経験は、これまでの人生になかった。おれは生まれて初めて、美しすぎると性別が曖昧に感じられるのだと知った。

男は切れ長の瞳を細め、涼やかに笑っておれを見下ろし、問い掛ける。

「私が視えますか？」

「え？　あ、はい……」
「ふふ、よかった♡」
姿を見ると、何故か自然と敬語になってしまった。でも外見だけで判断するなら年は近そうだ。せいぜい二、三個上。化け物だから、とてつもない年上って可能性もあり得るが。暫定、謎のレイヤー男はニコニコと人懐こい笑みを浮かべている。
おれは……目の前で起こった出来事を理解しきれず、放心していた。どういうことなんだ。間抜けな返事をしたきり固まったままのおれに男は臆せず近づいてきて、眼前ですっとしゃがみ込む。
「ところで……いつまでそんな中途半端なところにいるんです？　腰、痛めますよ」
「え、あ、確かに……」

「はい、つかまってください」
男は真っ白い手を差し伸べてきた。長くて綺麗な指だった。
おれは得体の知れないものに触れることを少しだけためらって、けれどその手を拒むこともできなくて、おそるおそる握った。ひんやりと冷たい。でも、ちゃんと形があり、触って確かめることができる。掌はおれよりひと回りは大きかったが女子みたいに白く、すべすべとしていた。しかし登ろうとしたおれがその手をぎゅっと掴むと、節くれ立った骨の感触を意識せざるを得なくなる。
片腕で引き上げるその力が思いの外強くて、おれは引き摺られるようにしてようやく二階にたどり着いた。その拍子にバランスが崩れ、ぐんと前のめりになる。
「おわっ、ぁ、んっ……！」

大きく前傾した体を立て直そうと、重力に逆らって顔を上げる。すると。
男の腕がふわりと腰に回って、おれの体をしなやかな動きで抱き留めた。
転ぶかと思い、ひゅっと息を呑む。
時が止まったみたいに、間抜けに空いたままのおれの口に、男の端正な顔が急接近する。
「っ、え……？　んっ……んんっ!?」
男の高い鼻がおれの鼻先にすれ違うように擦れ、細やかに生え揃った睫毛が至近距離に迫って。それで。
ぐに、っと唇が。
表面はひんやりと冷たくて、接触してるうち、中の熱がじわじわと押し寄せるように伝わってくる。あれ？　なんだこれ。唇、くっついてる。
おれ、いま、キスしてる。

脳では認識できても、瞬時に体まで命令が伝わらない。
唇を重ねたまま何秒目かでやっと、おれは思いきり男の胸を突き飛ばした。
「ひゃっ！　もう……痛いじゃないですかっ」
おれを助けたおまけにキスをした男は呆気なく離れた。ドンッ、と掌にはしる衝撃。やはりこいつは幽霊じゃない？　じゃあ一体なんなんだ。そして今の行為も。
おれは信じられないものを見るように自分の両手を見て、それからまだぬくもりと感触の残っている唇をなぞって、わなわなと震え出した。
「……はっ？　は？　はぁっ!?　い、今の……」
混乱し、慌てふためくおれとは正反対に、男は夢見がちにうっとりとしながら、何やらぶつぶつと呟いている。男の長い指先が、さっきまでおれ

にくっついていた形の良い唇をするりとなぞるのを見て、背筋がぞわっと寒くなった。
「あぁ……♡　一体何百年ぶりでしょう……♡　生身の人間から、直に得る霊力……っ、すごく、甘い……♡」
「……は？　なに訳わかんねーこと言ってんだ、この……ば、バカッ!!　お、おれのっ……はっ……はじめて、の……！」
火の付いたように怒鳴り出したおれを見て、きょとんと無垢な表情をつくった男は首をかしげて問う。
「初ちゅー、ということでしょうか？」
見た目にそぐわない単語が飛び出したことに驚きながらも、おれは荒い語気のまま噛みつく。
「は、はあ……っ？　そんなナリして、俗っぽいこと言ってんなよ！」

「あ、ちょっと待ってください！　人を見た目で判断してはいけませんよ？　私、こう見えても現代の事象にはかなり詳しくて……って、まあ私は人ではありませんけども……」
「ちょっ……待て、ほんとにお前……なんなの？」
「あやかしです。狐の」
　困惑するおれの問いに男はニコリと微笑み、事もなげにそう告げた。
「あやかしぃ……？」
「はい！　何百年も人間の霊力をこっそり頂戴して暮らしておりました！　正真正銘のあやかしでございます」
「狐のって……九尾のやつ、とか……玉藻の……？」
　おれがゲームでありがちな名前を思い浮かべてぽつぽつと口に出すと、男は愉快そうにけらけらと笑った。

「あははっ！　そういった、人々に広く知られているような妖とは全然、格が違いますよ。私は名無しの野狐ですから……」
「やこ？」
「簡単に言えば、野良ギツネということです」
「はあ……」
「ところであなた、お名前は？」
今度は逆に問い掛けられ、おれは一瞬口ごもる。見ず知らずの男に個人情報を漏らしてもいいものか……などと考えてしまったがもう今更……。おれがこの蔵に来てから見たものが夢だろうと現実だろうと、もはや常識が通用するような状況にはないことは明らかだった。
「みどー……せんり……」
おれがぼそっと呟くと、男はぱっと表情を明るくし、頭上の耳をぴんと

真っ直ぐに立て、でかい尻尾を嬉しそうに左右に振ってみせた。
「ああ！　御堂って、やはりそこのお宅の坊っちゃまでしたか。どうもすみません、この蔵を間借りさせてもらってます。いや間借りではないですね、一銭も払ってないので」
「いや、そういう問題じゃ……！」
「でも、この数年全く使っていなかったんですから、さして問題はないでしょう？」
「そ、それは……」
「もし良ければ、これからも貸してほしいのです。それに……」
男はにんまりと瞳で弧を描くと、するりとにじり寄ってきて、おれの耳元で囁いた。

「千里様のような方と視える方と出会えて……私、とっても嬉しいんです……♡」
「ひぅっ！」
突如距離を詰められて慄く。さっきの……キスのこともあったから、過剰に反応してしまう。
男の熱い吐息が耳をかすめてゾクゾクする。ありふれていてつまらないおれの日常に、男のように整った顔や形をしたいきものは当然存在しなくて、せいぜい画面の向こう側で眺める程度の、縁遠いものだった。それなのに。
「ふふっ♡　もしかして、童貞……ですか？」
「っ、だ、だったらなんだってんだよ!!」
今、まさにこの世のものとは思えないほどの美しい男が、触れようと思

えば容易く触れられるくらい間近で、形の良い唇をしなやかに歪ませている。信じられない状況に、おのずと体温が上がる。自分の感情とはほとんど無関係に。非日常に、体がバグを起こしている。

童貞なのは（悲しいが）単なる事実で、友達に冗談でいじられる程度なら、そこまで怒るようなことじゃない。ただ今は、歪んでもなお計算され尽くしたような男の口元が憎らしくて、そこにうっすらとした色っぽさを感じてしまった自分が、なんか、情けなくて。反発せずにはいられなかった。おれの感情などお構いなしに、男はふふんと機嫌よく鼻を鳴らして続けた。

「いえ……好都合だな、と♡　なにせ、初物から得られる霊力は格別ですから♡」

「なんなんだよ……えっ……ちょ、なっ!?　お前、何する気っ……!?」

男が、おれの腕を決して強くはない力で掴んだ。だというのに、瞬く間にあっさりと、おれの両手はまとめて捕らえられてしまう。そして、あくまで自然な雰囲気を装い、おれの背はぐうっと床に押し倒された。何か不思議な力が働いているとしか思えないような、実に華麗な流れだった。長い銀髪がサラサラとこぼれてきて、その毛先が刃のようにおれの頬をすっと掠めていった。

「嫌ですねぇ……こういうムードになったら、ヤることは一つですよ♡」

再び間近に迫った男の唇が蠱惑的に囁いた。

「セックス、いたしましょう♡」

「セッ!?」

「お恥ずかしながら、私、いつもお腹がペコペコで……。余裕のあるフリしてますけど……本当はすぐにでも霊力が欲しいのです♡」

「そ、そんなの……知るか！　つか……霊力ってなんだよそれ!?　今まではどうしてたんだよ！」

慌てている割には真っ当な問いが口をついて出た。男は一瞬考え込んで、それから淡々と説明を始める。

「ええっと……霊力とは、生きとし生けるもの全てが持つ力のことです。ただ存在するだけでも微弱な霊力は放たれていますから、私は街行く人々からそれをこっそりと拝借して何百年と生き長らえて……」

よよよ、と袖口で涙を拭う素振りを見せる男に、おれは率直な感想をぶつけた。

「コソ泥か……？」

「私だってね、そんなコソコソ余りもの盗んで食べるみたいな生活、もう嫌なんですよ……」

途端に男の目が怪しくきらりと光って、おれの下半身を捉える。しまった。油断した。その、まさに野生動物そのものといった鋭さにおれはヒッと息を呑む。

「だから、私とこうしてお話できるトクベツな……千里様のコ・コ♡　思いっきりしゃぶらせてください♡」

「え、あっ、いっ……いやだーっ!!」

いよいよ何が始まるか確定してしまい、咄嗟に全力の抵抗を始めた。こういう非同意の行為っていうのは、つまりは……レイプだ。イケメンだろうがあやかしだろうが、許されることじゃない。

しかしながら体格は男の方が立派で、日々に筋トレのきの字もないおれの貧弱な身体は、簡単に組み敷かれる。逃げられないようにしっかりとおれの腿の上に跨った男は、長い髪を軽く後ろに流して、小児科の看護師み

たいにおれをなだめだした。
「あぁ……怖がらなくて大丈夫ですよ〜♡　私も、もう何十年とシてませんし、いわば処女のようなものですから♡」
男はくすりと笑って、唖然としているおれのズボンを下着ごと引き摺り下ろした。何が大丈夫なんだ。突然の展開についていけないのは頭だけではない、さらけ出されたちんこもそうだった。当然萎えているふにゃふにゃの情けないそれに、男は自分のモノのように気安く指を添えた。
子どもの頃ならいざ知らず、物心ついてからは初めて触られる、ひんやりとした他人の指の感触。興奮なんて一ミリもない。緊張と、あるいは僅かばかりの恐怖に支配され、動けなくなっているおれに、男は信じられない言葉を吐いた。
「あぁ可愛い……♡」

会ったばかりの他人のちんこを前に、うっとりと頬を染めて嘆息する男に、おれの脳が危険信号を出す。体が動かない分、頭がぐるんぐるん回って、饒舌に抵抗の言葉を吐き出し始める。

「っ……ばか！　離せ！　大体おまっ、勝手に……どこ触ってんだよ!!」

「可愛らしい仮性包茎ですよ、千里様♡」

「はぁあっ!?」

百歩譲って童貞いじりはいいが、それはないだろ!?　年頃の男子にとって、その言葉が侮辱にしかなり得ないことは、人外だろうがなんだろうが、男の姿をしてる以上こいつにだってわかりそうなものなのに。本気で愛おしむみたいに、優しい声色で言うものだから、余計馬鹿にされたと感じてカッと頬が熱くなる。

けれどおれの童貞（ちんこ）は、男の白い指に挟まれ、揉むように擦られると単純

に硬さを増した。違うのに、と誰に言うでもなく心の中で言い訳をする。パニックが続いている。頭も体も、ずっと混乱してる。

「でも、ほら♡　ちゃんと勃起して、色づいた亀頭がお顔を見せてくれました♡　えらいえらい♡」

「あ、やめろばかッ、ぁ……♡」

少しずつ、息が上がっていく。おれの反応を見て、男は鬼の首を取ったように指の動きを達者にしていった。

くにゅくにゅ、から、ぐちゅぐちゅ、に変わり出した股間の音が聞くに堪えなくて、おれは両手で耳を塞いだ。掌からごうっと筋肉の蠢く音がして、それでも完全に水音から遠ざかることはできなくて。男の艶めいた声が、掻い潜るように聞こえてくる。

「えっちな音、してきましたね……♡」

「あ、うぅっ……あ、あっ……♡」

包皮に隠れてふにゃふにゃだったはずのおれのちんこは、男の手コキで呆気なく膨張した。先端からは透明で粘ついた期待の汁を滲ませて。まだまだ硬く育つ最中のそれを、節くれだった男の指が的確に刺激していく。

「う、あ……あっ……♡」

気付けば全身にびっしょり汗をかいていた。床に擦れる背中も汗ばんでいる。

見ず知らずの男の手で扱かれているという、異常事態。与えられる刺激に反応し、情けなくもおれのちんこはそこそこ勃ち上がってしまったが、十分な硬さにまでは至らなかった。

すると男は、んー、と不思議そうに首を傾げ、何を思ったか急に手を止めた。おれは両耳から恐る恐る手を離し、次は何をされるのかと慄いて、

硬直したまま男を見つめる。人は追いつめられると簡単に選択肢を見失う。逃げるという判断は今や思考の外にあった。

男は、おれの腿からほんの少し退いて、上半身をぐっと伏せて四つ足の獣のようになると、その綺麗な鼻筋をおれの股間に近づけていき……。

「うーん、でもこれじゃあまだ駄目ですねぇ……失礼♡」

「あ、おまえ、まさか……」

ハア、と生々しい息がかかる。

されたことがなくたってわかる。そんな位置に顔があるってのは、つまりそういうことだ。

やばい、と床に肘をつき、体を起こしかけたが、おれは次にやって来る刺激を一瞬先に、想像してしまった。そのよこしまな逡巡が命取りになる。

「いただきます♡」

男の口が、白い歯の並びの突き当たりまで見えるほど、綺麗にかぱりと開いた。てらてらと真っ赤に光る粘膜に、おれの亀頭が飲み込まれる。

「ぁ♡　っ、あぁ……っ♡　ぁ、ぅ……っ♡」

あつい。やわい。とける。

男の端正な顔の内側に、おれの充血したちんこはすっぽりと隠されてしまった。

「あっ、あ、や〜〜っ……♡　うっ……♡」

くらくらする。

熱くてぬるぬるしてざらざらしてる。直接的な快感がちんこから脳まで弾けるように全身を駆け抜けていた。

男は舌でねっとりと竿を愛撫して、尿道口から溢れる汁を啜って、それから喉の奥で扱くようにして本気でしゃぶっている。

そりゃこういうの、されたことはなくても見たことはあるし、純情ぶる気はさらさらない、けれど。それでも実際にされると、気持ちいいのと抵抗が混ざりあって、腹の奥がぞわぞわとじれったかった。そんなとこ舐めるもんじゃないだろ、とかいう常識的なことを頭の片隅で一応考えたりする。しかし考えた矢先にしぼんでいく。

おれは快感で瞼を痙攣させつつも、行為から目を背けることのほうがよっぽど怖い気がしてきて、前を見た。

男はこぼれる銀髪を気にもかけずに、ちんこに食らいついていた。やがて熱に浮かされているようなおれの視線に気付くと、じゅぽんっと下品な音を立ててようやく口を離した。そして、男の唾液とおれの我慢汁でぐちゃぐちゃに濡れながらそそり立つちんこに、見せつけるようにして真っ赤な舌を這わす。うそだろ。あぁなんか、それはちょっと――クる。

「っ……あ、ぅ……♡」
なにこれ。やっぱ化かされてる？
無理やりされてんのに、こんなのおかしいって。
男の舌はおれの完全に勃ち上がったちんこを更にせっつくように、舌先で竿をつついて、それから根元にべったりと舌の表面を貼り付けると、そのままれろぉっと亀頭に向かって舐め上げた。
「おっ……はっ、あ……っ♡」
おれは発情期の犬みたいなだらしない息を漏らして、男のぬらぬら光る舌から目が離せずに、いた。尖った舌先が縦横無尽におれのちんこを舐め回し、挙げ句の果てに男は再び熱い口内にちんこをぱっくりと迎え入れて、グチュグチュと含んで、弄んだ。

「はむ、んっ……♡　ちゅぱ♡　ぢゅぱっ♡　ぁ、んふぅ……♡　んっ、きもひぃ、れすかぁ？　ちゅぱちゅぱっ♡」
「んっ、あぁっ……も、やだぁあっ♡」
まるで下半身に取り憑くように、今日はじめて触った亀頭を喉奥まで招いて、すっと高くそびえる形のいい鼻をすんすんと鳴らし、嬉々としておれの陰毛に顔を押し付けているやばすぎる男がいる。整った白い顔が、黒く縮れた毛に埋まっていく様は快楽よりもとにかく恥ずかしくて、おれは必死に頭を左右に振って呻いた。
「あっ、やだ、やめっ……ばか！　んなとこ嗅ぐなぁっ！」
「んはーっ……♡　ぁあ……にほい、濃いれすねぇ……♡　おしゅのにほい……っんぢゅぷっ♡」
なにやらもごもご言ってるが、ちっとも頭に入ってこない。それよりも。

逃げたい。流石に恥ずかしいやら情けないやら気持ちいいやらで泣きたくなってきた。

腰を引こうにも臀部をがっつり両手で抱え込まれていて、下手に暴れてもびくともしなさそうだ。

一応運良く抜け出した時の想像もしてみる。でもカーペットもクッションもない硬い床に、大の男を蹴り飛ばした時の気まずさを思うと、良心が働いて、こんな状況でも激しい抵抗をするのは気が引けてしまった。それに。

「ぁっ♡」

男がひときわ大きな音を立て、尿道から我慢汁を吸い出すようにしゃぶり、おれの背がぐっとしなる。

最悪なことにおれは……ほんの少しだけ、この行為を最後まで続けたい、

と考え始めている。あともうちょっと踏み込めば、出せる。射精できる。こうなってしまうと、もうダメだ。勃起する程度のヌルい気持ち良さ止まりじゃなくて、一瞬でも射精の気配を感じてしまったら――引けない。もったいない精神じゃないけど、あっイケるんじゃないかと思うと、後戻りできなくなる。

「ん、ふーっ……♡」

獣らしく鼻息荒く、ぐぽぐぽじゅぶじゅぶと動き続ける男の舌は奉仕に一切の躊躇がない。おれの想像の中にあった、舐めてってこっちから押しつけて相手は遠慮がちに口に含むみたいな、恥じらいの仕草とは真逆の勢いだった。

比較対象がＡＶってのは悲しいが、それでも仮に恋人がこんな前のめりにしゃぶりついてきたってちょっと引くくらいの積極性だ。頭上の耳はピ

クピクと痙攣し、大きな尻尾も視界の奥でゆったりと艶めかしく揺れていて、上機嫌に見える。どうなってんだこいつ。少なくとも初対面の人間にやることじゃないし、やれたってそう簡単にやれることでもない。真っ当な、人間の神経を持っていたら。そうしてこいつが化け物であることを改めて実感する。

「んあひっ……♡」

玉の裏がひくついて、熱いものがこみ上げてくる感覚がある。間抜けに声が上擦って、おれは木目を指先で掻いた。下半身に意識が持っていかれる。

「っ、あ……♡　だめ、だっ、ダメっ……！」

「んっ……はぷっ……ん、ふぅ♡　駄目なことなんて、何ひとつありまへんよぉ♡」

咥えたまま喋るせいで、熱い吐息が裏筋にかかっている。ごぷごぷと下品すぎる音が止まない。また耳を塞ぎたくなったが、腕は二本しかなく、床板をじっとりと手汗で湿らせるのと、せめて反抗しようと伸ばした片腕で、男の肩を強く握って遠ざけようとするので手一杯だ。力を込められる場所があると、余計快楽に集中できるのが嫌だった。なんもかんも嫌なのに、気持ちいいから腹が立つ。

「おっ……あぁっ……♡」

そのまま滑った手が、掴む場所を求めて男の髪をまぜっ返した。涼しげな外見とは裏腹に頭皮には熱がこもっていて、その銀糸みたいなやわらかい髪をかき乱すと、指先が心地よかった。毛の生え揃った耳の付け根に指が当たり、男がひぅッ、と一瞬だけ高い声で鳴いた。ぐぽんっと勢いづきながら口が離れる。

「ん……もう、千里様ったらぁ……♡　悪戯はめっ、ですよ♡　はい、これですっかりおっきくなりました♡　これなら十分……♡」

男が口元を拭いながら笑って体を起こす。

「っ、ぅ〜〜ッ……」

あともう少しでイケたのに、なんて思ってしまったおれはふがいなさに呻くばかりだ。立派にそり返ったちんこは自分の目にもはっきり映っているので、今更抵抗や否定もむなしい。

芋虫みたいにうごうごしているおれを跨いで立ち上がって、男はするりと片足ずつ、流れるように下衣を脱いだ。きっちり着込んでいるように見えたから、意外と簡単に脱いでしまえるのだなと感心する。あやかし力（ちから）のご都合展開かもしれないが。

中から現れたのはおれと同じ、男の、ちんこだ。ガチガチに勃起してる

ところまで一緒。こんなに綺麗なツラしてるんだから、もしかしたら……とかちょっと考えて期待っぽいものをしてしまった自分がヤバい。男は、当然のようにさらりと言った。

「では、挿れますね♡」

「い、れるって……まさか」

「はい♡　そのまさかです♡」

刹那、ぎくりと身体が強張る。けれど二択は、かろうじて最悪の方を免れた。男は片腕を背後に回して、なにやら悩ましい声を上げながら背をくねらせる。何を、と思うもののすぐに察する。その身体がおれと同じつくりであるならば、恐らくそこにある穴を慣らして、広げている、ということを。

「ん、はぁ……ッ♡」

男の口から艶っぽい息が吐き出される。入るのか？　よくわからないが、男同士だとそこを使うのだ、という知識だけはおれにもあった。窄まった穴の縁を宛がわれ、それが重力に任せて落ちてくると、みぢっ、ときつく亀頭に圧がかかる。あ、これはやばい。本当に食われる。本能的な恐怖がやめろ、と声を出す前に、鈴口がぬるくざらついた穴の中ににゅるにゅると引き込まれる。

「おっ……♡」

背筋を得体の知れない感覚がゾクゾクと駆けて、たまらず仰け反った。大口を開け、はあ、と全力で息を吸う、吐く。二階がいくらか綺麗ったって一階とは扉もなく繋がっている建物だから空気は埃っぽい。細々とざらつく塵や埃を吸い込みたくないという理性はかき消されていた。今はただ、より多くの酸素が欲しかった。

「んっ……あ、あぁ……っ♡　入っ、ちゃ……いましたぁ……♡」
　男は恍惚の表情でおれを見下ろした。童貞喪失。相手は人間ですらない。おれは気持ちいいやら意味が分からないやら、相反する感情でめちゃくちゃになり、じんと目元が痺れた。
「ひっ……ぉ、ぅ……も、やだ……ぁ、抜けよぉ……」
「あぁ、泣かないで……そんなにお嫌でしたか」
　男がこてんと首を傾げ、熱っぽくおれを憐れむ。そんな無害そうな仕草に騙されるか、嫌に決まってんだろ！　と間髪入れずに叫びたかったし、そうすべきだった。さもなくば同意の上での行為になってしまう。しかし初めての挿入にキャパオーバーを起こしたおれは、半泣きでただぐずぐずするに留まっていた。
　男の指が伸びてきて、そっと目尻に浮かぶ涙を拭った。散々おれのちん

こを弄んでいたために我慢汁がべっとりついた指先は目の粘膜のそばでぬるりとつめたく滑り、おれはその気色悪さにゾッとして、若干正気に戻る。むせ返るようなどうしようもない感情で喚いた。

「うっ、わぁ、あ……わあぁん……離せよぉっ……」

「あぁ……よしよし、泣かないでくださいね……今気持ちよくしてあげますからね……♡」

またもや子どもでもあやすみたいに優しく……本当に優しく言うもんだから、話の通じなさに心の底からがっくりとする。会話ができそう、と思えたのは最初だけで、割とずっと噛み合っていない。そうして全身が弛緩したタイミングで、滑り込むように別の感覚がおれを支配する。

男が根元までずぶずぶと押し込んだおれのちんこをほどよく食い締めながら、ゆるやかに腰を浮かせた。

「んっ、あ……やめっ……♡」
「ぁ、はぁっ♡　千里様のオチンポおいしいですよ……っんッ♡」
下品な言葉遣いで唇を歪め、男はおれを挑発しながら今度は腰を沈める。深い吐息とともに、おっ、と濁った声が漏れていた。入り込んだかと思えば、内側が締めつけたままずろろ、と引き抜かれる。その繰り返しがおれを襲う。
燃えるように熱い下腹から脳まで一直線に快感の信号が奔る。
セックスって、こんなに気持ちいいもんなのか？　突然犯されても身も蓋もなく感じてしまうくらい、気持ちいいものなんだろうか？
埃っぽい室内に響くねちゃねちゃと場違いな水音をＢＧＭに、やっぱり、おれって化かされてる？　って、また自分に問い掛けた。ずっと、全身総毛立つみたいに、微弱な甘い電流を感じてる。そういう術なんじゃないか、

などと現実離れした考えに逃避していた。化け物とセックスしてるから、乱暴されても気持ちいいんだ、そうに違いない。

そう思い込まなければ、気が狂ってしまいそうだ。

動きに合わせて嘘みたいなボリュームの尻尾がゆれている。九尾ではなかった。ホウキみたいにぶっといひとかたまりの毛だ。

視線に気づいた男がさっと顔を赤くする。

「あ……♡　そんなにみないでください……♡」

勝手に跨って腰を振るのは良くて、尻尾を凝視されるのはだめなのか。こいつが恥ずかしがる基準がちっともわからない。

おれの視線を逸らそうとしたのか、男はまた煽情的に身をくねらせて鳴いた。

「あぁっ……♡　ほら、奥……入ってきちゃい、ます……ぁあっ♡」

「んぁっ♡　おまえが、勝手に、いれてんだろ……ッ、あ♡」
背後から追い立てられ、狭い洞窟の中に身を屈めて入るみたいに、おれのちんこはざらついた熱い道を無理やり進入していく。体内のよくわからない場所をゴリゴリと強制的に擦らされて気持ちは嫌がっても、体はその感触に追いすがろうとする。
だって、これがはじめてだ。
そりゃ一人じゃ数え切れないほどしてきたし、画面越しやあるいは妄想で、そういう場面に思いを馳せて、ってことはあったけど。今身に降りかかるこれは、まぎれもない現実で。もしかしたらこれっきり――なんて、不吉なことを考えるのは、よそう。
「こ、ここぉっ……ごりって、あっ、ここ気持ちい、んですよっ……♡」
「んっ、は、へ……？」

腰を振る男の細い瞳の縁にきらり、と何かが光る。亀頭が、内側にある何か、しこりのようなものに当たっている。腹の中に何かを入れるってのは、涙が出る程そりゃあ苦しいだろうと思う。それでもやめないのは、上回る快楽があるからか。乞われるままそこを擦り上げた。すると殆ど反射のように内側がぎゅっときつく締まった。

「ここ、なんか……すげ、うあっ♡」

「あ、あっ、ひっ♡」

次第に男の声が上擦っていく。女の子みたいに高いわけじゃない、それでも低い音の中に切羽詰まった吐息が混じって、長い髪を振り乱して……そうだ、こいつ、男なのに髪が長いから、さっきから視覚的には結構クるものがあって。

「それぇっ♡　あ、しょこっ♡　あうっ♡　あ♡」

「なんだよっ、これぇ…あっ♡　ここ、すっげ、擦ると締まって、あ、気持ちいっ……おぅうっ……♡」
「おッ♡　ぁっ♡　あ♡　せんりさまぁっ♡　あ、そこ♡　コリコリしてるとこ、いっぱいこしゅってくらさぁいっ♡」
おれは夢中になってそこを擦って、責め立てていた。いつの間にか男の腰を掴んで、固定して、自ら能動的に求め始める。
「なんで、なんなんだよっ……おまえっ……く、おっ、あ……ぁあっ♡」
男は男で、おれがくびれを押さえたのを好機と捉えたのか、腰をゆらめかせて好き勝手に抜き差しし始めた。
こいつ、さっきから……人のちんこで勝手にオナニーしやがって！
悔しい。悔しいけど、自分じゃもうこの男を止められないし、今はただ射精の予感に、分離していたはずの頭と体が結託しようとしている。

「やばいっ、おまえ、とまれってぇ……♡　これ以上は、ほんとに……出ちゃ、からぁ……♡」
「ぁっ♡　あはっ♡　いいんですよぉっ、お好きなだけ出してください♡」
低い色気のある声で脳みそを揺さぶられて痺れるほどゾクゾクした。言われるがまま腰を振ってしまう。がむしゃらに突いてしまう。
男は自分の腰を掴むおれの手に自分の掌を重ね、ぎゅっと押し付けて握り込み、言った。
「私に、千里様の霊力くらしゃぁいっ……♡♡」
こいつの顔がいけないんだ。この、妙に整ってるくせにバカっぽく歪む表情……ゾクゾクして、おれを狂わせるんだ。そんなふうに責任転嫁して。
このムカつく衝動を、今こいつにぶつけるとするなら、それは繋がった箇所からの激しい突き上げに乗せてやるのが、きっと一番効率がいい。

「ぁあぅ♡　イクッ、あ、ナカで、ぁっ♡　イっちゃいますぅっ……♡♡」
「ぅ〜〜っ……おっ、ん……っ♡　お〜〜〜……でるっ……♡」
　ずしりと重たく感じられる玉の奥から、精液を吐き出したいという信号が脳に走る。ここに来てそれを、かすっかすの理性が跳ね除けようとする。ダメだダメだダメだ。こんなわけわかんない奴にレイプされて射精なんかしたら負けだろというプライドと、ここで射精することで得られる、全身が痺れるような快感を天秤にかけた。結果は言うまでもない。
「あ、おちんぽビクビクしてますぅ……♡　んぅ、出してっ♡♡　ぁっ♡　あぁっ♡　せーし……出してくらさいっ♡♡」
　白い顔をうっすらと赤く染め、男は己の美貌を下品に歪ませ、汗だくで必死にねだっていた。おれを。おれのことを。
「あ、くそっ……むり♡　でる、でるッ、あ〜〜……でる〜〜ッ……♡」

結局、あほみたいな声出して思いっきり射精した。勝手に腰が浮いて尾骨のあたりが反る。腹の底に溜まっていた欲望を根こそぎ吐き出そうと大量の精子が体内から放出された。

「はっ、は、はぁっ、あ、ぁ……」

呼吸が最優先事項で、遅れて徐々に正気を取り戻してゆくと、ただただ後悔が全身に満ちた。過去一番の壮絶な賢者タイムだ。

おれの上に跨った男は恍惚の表情を浮かべ、痙攣しながら、硬さを失っていくおれのちんこを意地汚く食い締め続けている。本当に文字通り、吸われている感覚がある。霊力、とか言っていたのを思い返す。精液と一緒に魂まで抜かれてしまいませんようにと祈る。

その不思議な感覚はしばらく続いて、その後満足した様子の男は、ふぅ、と息を吐くとようやくおれの上から退いた。

「ごちそうさまでした……♡」
終わった。おれはそのままばたんと床に仰向けに倒れた。全身からすべての力が抜けてゆく。
とにかくショックだった。激しい自己嫌悪。まさかこんな形で童貞を捨てることになるとは。
今朝のおれはこんなこと微塵も想像していなかった。できるわけがない。蔵の掃除なんかやるって言わなきゃよかった。
実は夢オチだった、なんて都合の良い展開にならないかと思って、おれは深く目を閉じてみた。現実で目覚めたいと思った。数秒間だけ静かな暗闇があって、それから、やわい毛がおれの頬をくすぐって邪魔してきた。
「んふ、疲れちゃいました？」
渋々目を開けた。どうあがいてもここが現実らしい。自称あやかしの男

は隣に寄り添って寝ていて、頭頂の獣耳がおれの頬に擦りつけられていた。こそばゆい。あーなんかもう、どうでもよくなってきた……。

「なんだよ……」

傷心のおれは力なくつぶやく。男は完璧な表情でおれに微笑みかけた。

「千里様の霊力……すごく、すっごくおいしかったです♡　これからも分けていただこうと思ってますので、よろしくお願いしますね……♡」

「え、これから!?」

思わず飛び起きたおれを床でごろごろしながら見上げて、男はしれっと頷く。男は少し目を離した隙にもう服を着ていた。なんでもありすぎる。

「はい♡　あ。でも、もし嫌だって断ったりしたら……呪っちゃうかもしれません、よ」

言葉尻でスッと細められた目に異様な光と有無を言わさぬ圧力を感じて、

おれは今日一番の恐怖を覚える。やはりこいつは人ではないのだ。
……というか、もう既に呪われてるんじゃないか、これは。

こうしておれは、あやかしの男で童貞を卒業してしまった。
おれたちは最悪の出会いを果たし、この、ぶっ飛んでるあやかしの狐野郎はそれからしばらくの間、おれんちの居候として過ごすことになる。
それまでの、平凡の見本のようなおれの人生は、こいつに出会ったせいであっけなく、音を立てて崩れ去ってしまった。
この日のことを、おれはたぶん、一生忘れないだろう。埃っぽくて生暖かい、化かされるにはうってつけの春の出来事だった。